

V. 小樽商科大学学術研究奨励事業

第4回「学生論文賞」

総 評

学生論文賞実施委員会
委員長 近藤公彦

「学生論文賞」として4回目となる今年度は、学部生部門に44編、大学院生部門に2編、計46編の応募がありました。この応募数は昨年度に比べてほぼ倍増し、学生の皆さんの研究成果の発表の場として、本論文賞が定着してきたことを示しています。学部学生の部では、専門ゼミで学ぶ4年生が卒業論文の研究を兼ねて応募するケースが多くを占めますが、今年度の特徴としては、2・3年生からの応募が少なからずあったことが挙げられます。所属学科等では商学科と社会情報学科が多く、今後、学科の広がりを目指したいところです。また大学院生の部では、アントレプレナーシップ専攻（ビジネススクール）の社会人学生の論文が寄せられました。

審査は、プレゼンテーションによる第1次審査と論文審査による第2次審査の2段階で行われます。第1次審査の発表数は43編（学部学生41編、大学院生2編）で、延べ360名の教員が審査に当たりました。このうち辞退者を除く30編が第1次審査を通過し、第2次審査に進みました。大学院生の部からは、残念ながら通過がありませんでした。第2次審査では、延べ54人の教員が論文の評価を行いました。こうした厳正なる2段階審査の結果、大賞となるヘルメス賞1編、優秀賞4編、奨励賞19編が選ばれました。このうち優秀賞1編は、第1次審査のプレゼンテーションで最高点を獲得した論文に授与されるベスト・プレゼン賞とのダブル受賞となりました。なお、実施委員会において特徴的な評価を得た論文に対して与えられる特別賞は今年度、該当する論文がありませんでした。

プレゼンテーションによる第1次審査では、限られた時間のなかでいかに効率的・効果的に論文の内容を伝えるかが重要となります。また第2次審査では、論文形式・アプローチ・方法論、テーマ設定、論理構成、独創性の点からより厳密に論文の「質」が評価されますので、十分な推敲が必要です。ヘルメス賞、優秀賞の上位入賞論文は、第1次審査、第2次審査をとおして審査者から万遍なく高い評価を得ています。奨励賞受賞論文は、これらの点で一部、上位入賞に及ばなかったものです。全体としては、自身で調査や一次データの収集を行った独創的な論文であることが評価を高め、逆に、先行研究のレビュー不足や論文全体の論理構成の弱さが評価を下げる結果となっています。高いレベルの論文を目指す皆さんには、プレゼンテーション・論文執筆に当たり、論文の基本的な様式のほか、テーマのユニークさや研究アプローチを「独りよがり」ではなく客観化・相対化するため

の理論的な裏づけを十分に意識することを心掛けてください。

本論文賞では、第1次審査、第2次審査ともに審査者から論文評価のフィードバックが行われています。この評価は論文執筆や研究能力のレベル向上につながるものですので、ぜひ今後に役立てていただきたいと思います。

最後になりましたが、本論文賞の実施に当たりまして、株式会社北洋銀行様より多大なご支援を頂戴いたしました。記して感謝の意を表します。

小樽商科大学 学術研究奨励事業第4回「学生論文賞」結果

○学部学生の部

結果	タイトル	応募者
ヘルメス賞	Genre Analysis of Self-introduction	佐藤 亜美
優秀賞	i-vacsプロジェクトのマーケティング分析と今後の戦略	工藤 朋美
	証券化商品におけるリスク計測	小鹿 智紀
	女性の能力と企業業績 (*ベスト・プレゼン賞)	川口 枝里子 石山 真央 岡田 知佳 近藤 亜沙美 多田 未樹 渡邊 啓介
	ふるさと納税制度の活用に関する実証的研究	永峰 由佳
奨励賞	仮想空間におけるネット・コミュニティ・ビジネスの確立	坂間 十和子
	学校裏サイトの誹謗・中傷に含まれる人名・組織名の抽出に関する研究	古俣 優花
	CSR活動と企業業績の関係	大竹 佑亮 佐々木 達識 佐藤 美佳 深井 梢
	対話型遺伝的アルゴリズムを用いたYOSA KOIソーラン隊列考案支援システムの有効性検証	高橋 一人
	環境経営 ～環境対策と企業財務業績の関係～	新川 諒介 太田 優子 金兵 省吾 佐藤 愛
	プロサッカーにおける顧客関係管理	栗城 慶介
	PPP手法による道路空間整備について～広告添加型のバス停留所を事例にして～	川内 喬太
退職後の余暇活動～北海道の都市部と郡部における分析～	佐藤 由希絵	

奨励賞	小樽市の財政からみた地方財政の問題	村上 佑輔 佐藤 亜希子 山崎 泰輔
	大学生活におけるメタ認知能力の早期育成の実現	秋野 舞里紗
	The evaluation of eco funds	福沢 茜
	ニコニコ動画における、面白さ共感ポイントの発見	工藤 和寛
	ビジネスエリアにおける企業間コミュニティと個人間コミュニティの違いについて～丸の内における地域コミュニティを研究対象として～	鳴海 雄大
	ネットショッピング成功のためのマーケティング戦略	矢口 真梨子
	業務利用推進によるコミュニティサイクル事業の発展可能性	葛西 美樹子
	人材紹介会社の経営戦略～リクルートエージェントのケース分析～	福士 拓也
	家具業界における競争戦略 ～ニトリとイケア～	湯浅 拓也
	木造建築の民家が形成する小樽の歴史的な町並み保全の提案	朝長 久美子
	公共施設のネーミングライツビジネスに関する分析	荒井 麻梨乃

○大学院学生の部

該当なし

副賞 ヘルメス賞 10万円 優秀賞 5万円 奨励賞 1万円
 ベスト・プレゼン賞 1万円

各論文講評（優秀賞以上）

（学部生の部）

ヘルメス賞

佐藤 亜美「Genre Analysis of Self-introduction」

本論文は、言語学の談話分析において「言語と言語外要素との影響関係を分析する」ために有効とされるジャンル分析法を適用し「日本人大学生における自己紹介」をテーマに扱った英文論文である。これまで「書き言葉」テキストを中心に行われた先行研究の精査、ジャンル分析法の解説も明快で、論理の構成と展開も手堅い。「自己紹介」という一分野の

分析にすぎないが、これまで本格的な研究の手薄な「話し言葉」の談話分析に成功している。録画した75の「自己紹介」データを、ゼミ、クラブ、コンパなど場面における変異を考慮した上で、発話展開の特徴、発話外要素との関係、参加者相互の関係を指標に分析し、日本人大学生の自己紹介に見られる典型(prototype)を抽出している。その自己紹介の典型には、他の文化には見られない、集団内で良好な人間関係を築きあげるための「集団への協調性」という日本人のコミュニケーションにおける特徴が確認できたことは、本論文の独自性であろう。

優秀賞

工藤 朋美「i-vacs プロジェクトのマーケティング分析と今後の戦略」

本論分は、本学のゼミナールで実際に取り組んでいるプロジェクトを客観的に整理・分析・評価したものである。在籍学生の立場で、このテーマを取り上げる事自体、勇気が必要となるが、敢えて問題提起とも言える論文を発表したことを評価する。

本プロジェクトは、札幌の「狸小路商店街」の活性化を狙い、同商店街との協同で始まった。IT技術を用いて、閲覧者に仮想的な商店街を体験させ、そこに様々な特典を付すことにより、顧客を実際の狸小路商店街に呼び戻すことを狙っている。

論文は独自の研究成果・意見で構成されており、オリジナリティが高い。

学生のプロジェクトは、所謂「代替わり」があるため、担当の学生が交替する度に一貫性を欠く場合が多いのが普通だが、筆者は強い信念を持って本プロジェクトを推進すべきと訴えており、論理構成もしっかりしており、読み手を納得させるレベルを持つ。

小鹿 智紀「証券化商品におけるリスク計測」

本論文は今現在最も社会的関心度の高い経済学の課題の一つである金融危機の原因究明に取り込んでいる。論文は資産の証券化と金融市場のシステムティック・リスクに対する感応度の増大との関連性について論じた。さらに、統計学的なテクニック、コンピュータを利用してシミュレーションで証券化商品のリスク構造を再現した。

論文の前半は証券化商品の仕組みに関して説明し、金融機関は証券化商品を利用してサブプライムローンのオフバランス取引を行い、自己資本比率を保ちながら、サブプライムローンバブルを作り出したことを指摘した。さらに、ハイリスクなサブプライムローンがABS(資産担保証券)やCDO(債務担保証券)およびそれらの複合商品ABSCDOなどの複雑な証券化商品の形で広く市場に出回り、結果として金融リスクの分散が図られてきたが、一方では金融市場のシステムティックリスクに対する感応度が高まったことを説明し

た。論文の後半は統計学的なテクニックであるコンピュータ・シミュレーションで証券化によるシステムティック・リスクに対する感応度の高まりを再現した。

本論文は社会的関心度の高い課題に取り組んだ点と高度なシミュレーション技法を駆使した点で評価されるべき。独創性に関しては足りないところがあるが、総合的に判断すると、卒論として十分優れた論文と認める。

川口 枝里子 石山 真央 岡田 知佳 近藤 亜沙美 多田 未樹 渡邊 啓介

「女性の能力と企業業績」(優秀賞/プレゼン賞)

この論文の優れた点は何よりその明快さである。記述は、主題の紹介から始まり、論点の提示、分析手法の解説や結果の記述、政策提言へと、グラフなどの適切な援用によって、論旨が乱れることなく流れるようにすすみ、読むものを混乱させることが一切無い。

学生論文賞のいままでの審査経験から言っても、このような論文はむしろ希少であった。それらの論文で時に見られるのは、自らが想定した結論に議論を無理に誘導するようなもので、前提とした結論を得るために議論に歪みが生じ、結果として不可解な印象をあたえてしまう。しかしそれは社会科学ではない。

その点、この論文は仮説を正面から検証しようとする試みが故に、分析の限界も見て取りやすい。しかしそれこそが本来の社会科学の姿である。このような明快・公正な議論を行った著者達の態度は知的・倫理的にきわめて高く評価できるもので、まさに優秀賞に値するものであると考えている。

永峰 由佳「ふるさと納税制度の活用に関する実証的研究」

ふるさと納税制度（自治体への寄付金の一部を個人住民税から税額控除する仕組み）が導入されてから約2年が経過しようとしているが、ふるさと納税制度がどれだけ活用され、どういった課題が残されているのかを検証する試みはあまり行われていない。こうした問題意識に基づき、本研究では道内30市町村を対象に地道なヒアリングを実施している。

本研究では以下の点が明らかにされている。ふるさと納税制度を利用した寄付金件数は自治体の住民数と概ね比例すると予想されるが、調査の結果、両者の間にそういった傾向はあまり見られず、特定の自治体に寄付金件数が集中していることが示された。この中には財政破綻に関する報道や観光面で全国的に知れ渡っている自治体も含まれるが、必ずしもそうとは言えない自治体にも多くの寄付が寄せられているのである。無論、ふるさと納税への取り組みは自治体によって千差万別であるが、本研究では寄付金の使途に着目し、寄付者が寄付したいと思うような事業を自治体が設定しているかが成功の鍵となっている

ことを指摘している。

上述のように、ふるさと納税制度の実態についてはまだ明らかにされていない部分も多く、本研究の独自性は高い。また、地方税のあり方、地域間格差の問題、自治体のガバナンスといった観点から考察を加えることで、多くの知見が得られる研究となるだろう。

審査員一覧（五十音順 *印は2次審査）

相内 俊一*	石黒 匡人*	石田 三成*	今本 啓介	江頭 進*
海老名 誠*	大島 稔*	大津 晶*	岡部 善平*	奥田 和重*
小田 福男*	乙政 佐吉*	加賀田 和弘*	カルヤヌ ダニエラ	
木村 泰知*	金 鎔基*	小林 友彦	近藤 公彦	齋藤 一朗*
堺 昌彦*	佐野 博之*	渋谷 浩*	杉山 成*	角野 浩*
田中 幹大	玉井 健一*	辻 義人*	出川 淳*	寺坂 崇宏*
渡久地 朝央*	中村 健一*	中村 秀雄*	沼澤 政信*	篠本 智之*
深田 秀実*	プラート カロラス*		宝福 則子*	前田 陽*
横村 栄美*	李 濟民*	劉 慶豊*	和田 健夫	

第1次審査（11月17日）



表彰式 学長を囲んで（3月18日）

